

(続) 行きたいところ

前回は、行きたいところを具体的に考えないと先に進まないと考え、候補地の1つとしてハワイを挙げた。たまたま目についた、「おじさんハワイひとり旅」(辻村祐治 著)を読んでみた。著者のハワイへの強い思いを引用してみる。

「ああ、ハワイは今頃、日暮れ時だ。ああ、ハワイへ行きたい」

と一日一度はつぶやき、実際、二回目は息子と二人で行ってきた、三回目は娘たちと三人で行った。

そして今年の春にはついに一人で行ってきた。母親を亡くしてから、仕事の都合で夫婦では行けなくなったのだ。

しかしひとり旅はいい。本当にいい。滞在中に自分自身の安全に気をつけるだけで、好きなときに好きなところへ身軽に行動できる。買い物に付き合う時間も、全くない。完全な自由だ。これこそ私の求めていた旅ではないか。

よし、こうなったら秋にも行こうと考えて、ハワイを想う気持ちを日々、奥サンにネチネチと訴えつづけ、

「リタイアしたら一緒に行こう。なっ。なっ」

などと、宥めたりすかしたりした結果、今年二度目のハワイひとり旅がついに許可されたのだった。

著者はこうしてハワイ行きとなったが、この本には時系列にどこに行って何をしたかの類を書いているだけ——ぶらぶら歩き、バス移動、ビール、映画、……。

これは、自分が求めているものとは違う。半分まで読んで、本を閉じた。

次に、「軍事遺産を歩く」(竹内正浩 著)を読んだ。まえがきを引用する。

終戦からすでに六〇年。明治維新から数えれば一四〇年が経とうとしている。調べていくうち、消滅したかに見えた大日本帝国の痕跡、とりわけ軍事関連の遺跡が、全国に思いのほか残っているのがわかった。しかし、近代化遺産として称揚される産業・土木遺産とは異なり、ほとんどは何の手だてもとられず、ひっそりと山野に埋もれていた。そして戦前の状況を知る人はもちろん、終戦後の姿を記憶している人も少なくなってきた。

今行っておかなければ消えてしまう。現地はどうなっているのだろう。文献を調べるだけでは見えてこないリアリティがあるのではないか……。焦燥にも似た気持ちが湧いて、矢も盾もたまらなくなった。そこから先は残された時間との競争とってよかった。

戦前・戦中と戦後を訪ねて——旅は根室から始まる



納沙布岬に通じる道端にはソ連兵を描いた看板が何枚も立っていた。

このまえがきを読むと、著者の気持ちが伝わってくる。

本文を読んでいくと、ソ連参戦の話と占領糾弾の看板を写した写真があった。

「千島の戦争は、ポツダム宣言受諾を告げた天皇の放送から三日後、昭和二〇年八月一八日に始まった。早晩、千島最北端の占守島(しゅむしゅとう)に上陸したソ連軍は日本軍守備隊と激戦を展開する。以降、島づたいに南下を始め、降伏文書調印の九月二日を三日過ぎた九月五日までに、全千島を占領下においた」

8/15以降に戦争が始まったとは知らなかった。

日本のことすらわかっていない——行きたいところは、日本にもあるはずだ。

要は、関心の持ち方次第だということに気づいた。